

# 斎藤茂吉『小園』の「こらへるといふは消

## 極のこらへらず」の一首をめぐって

清田文武

### Abstract

During World War II, in 1944, Saito Mokichi composed this tanka: *Koraeruto does not mean.....* (listed in the volume entitled *A Small Garden*, 1949). He had got the inspiration while watching a bunch of butterbur sprouting in the early spring and wrote the tanka above. The very vital point is that he employed the words 'passiveness' and 'activeness' in it. The inspiration is considered to have been drawn from Clausewitz' s strategic theory of 'the pure resistance' said in *On War (Von Kriege, 1832-34)*. But Mokichi used the words just for expression, not for his assertion of his idea about *On War*. Mokichi is thought to have responded to *On War* in different way from Mori Ogai whom Mokichi respected and whose Japanese translation of *On War* he had read. Focusing on the vocabulary and expressions which Mokichi borrowed from Ogai' s writings helps to study on his relationship with Ogai and some of Mokichi' s personality.

キーワード・・・ 露の臺 消極 積極 クラウゼヴィッツ

### 戦論

斎藤茂吉の短歌や文章には、森鷗外の語彙・表現によって考えられるものが散見する。語彙の場合、鷗外に負っているといっても、それは既存の語であるこというまでもないが、なかには鷗外の造語にかかるものも見いだせる。こうした語彙であっても、茂吉の側からすると、知らず識らずのうちに他から学んだものもあるかもしれないが、鷗外とのかかわりをおさえることによつて、茂吉の世界に通ずる回路を発見でき、その人と作品との理解・解釈に資するところのある場合もあるであろう。このような方面は、今後考察の対象として考えられてよいと思う。本稿では、『小園』の一首を取り上げてみることにしたい。

『小園』(昭和二四・四)は、太平洋戦争中の昭和十八年(一九四三)から翌年にかけての作物を収めた歌集で、茂吉数え年六十三歳、昭和十九年のパートに五首の一連の作が見える。戦局の影が濃く落ちていることのわかる歌である。

### 露の臺

朝はやき土間のうへには青々と配給の露の臺十ばかりあり  
南瓜を猫の食ふこそあはれなれ大きたたかひこころに及びつ  
活の手足まとひになるべくはありの儘にてこもり果てむか  
こらへるといふは消極のことならず充滿たむ積極を要約とす

る

雨ふらぬ冬日つづきてわが庭の蔦の蔓の萌えいまだ目だたずこのうちで考察したいのは第四首であるが、これだけを取り出した場合、歌そのものからは、蔦の蔓を詠じた作とは読みにくい。

茂吉は一首の独立ということを考えた歌人であつたけれども、ここでは連作的妙味を期す心があつたものと思われる。高足佐藤佐太郎の編にかかり、茂吉の「序」を巻頭に置く『斎藤茂吉秀歌』（中央公論社、昭和二六）にはこの歌を次のように示してある。

こらへるといふは消極のことならず充滿たむ積極を要約とする（蔦の蔓 録一首）

従来正面から考察の対象となつたことのない作品であり、土屋文明編『斎藤茂吉短歌合評 上・下』（明治書院、昭和六〇）にも取り上げられていないが、この歌人を考えるとき、注目してよい一首であらうと思われる。

茂吉には蔦の蔓に対する思いに深いものがあつたらしく、これを題材にした短歌は少なくない。それは出羽の農村に生まれ、少年の日までそこで育つたことによるところが大きいであろう。随筆『念珠集』（昭和五・八）には、近在の山の雪が消え、春が一時に来てふりそそぐ陽光の下、萌えはじめた木々の芽について、「苞をようやく破つたばかりの、白っぽいような芽だの、赤味を帯びたようなものだの、紫がかつたものだの」を自分たち子供らが摘む喜びを書いている。ここでは蔦の蔓を指していないけれども、心持ちとしてはそうした中にこれを含めて考えても、多くを誤ら

ないと思われる。母の火葬でその遺骨を蔦の葉でくるんでもいる

など、この植物には格別のものを感じていたようである。留学中ドイツのミュンヘン近郊のアルゴイに遊んだ折には、蔦の蔓を見てその香をかぎ、故国を思い出したりしている。明治三十九年（一九〇六）春伊藤左千夫の門を叩いたときも、持参の歌には、後年『赤光』（大正二・一〇）に収めることになる「来て見れば雪げの川べ白かねの柳ふめり蔦のとも咲けり」もあつた。『のぼり路』（昭和一八、一一）には、

一つ鉢にこもりつつある蔦の蔓いづれを見ても春のさきがけの詠があり、『白き山』（昭和二四・八）には疎開の地大石田における昭和二十一年（一九四六）の

みづからがもて来たる蔦の蔓あまつ光にむかひて震ふ

といった作も見える。結句の「震ふ」は自動詞であるから、光に向かつて蔦の蔓自体の震うさまでなければならず、『のぼり路』の右の二首目の下句も、これに通ずるところがあつて、ともにすぐれた描写になつている。比喻的、空想的に表現したのではなく、微細な観察、対象に沈潜した写生による作品である。茂吉には、苞にこもっている観のある蔦の蔓のさまは、めでたいものであり、特に、老いの身にとつてなぐさめともなつたと解することができる。「こもる」状態に憧れる心が歌人にあつたことは記すまでもあるまい。これら三首も春の光に対するこの草本をよく捉えて心を打つ表現となつている。西欧で体験したそれとは異なる早春の耀

く、好ましい陽射しが作歌の背景にはあったと推定される。

こうおさえるとき、掲出歌の「こらへる」という状態もまた「こもる」姿に通ずるところのあることは、前後に詠まれた歌によっても首肯できるのではなからうか。この短歌を解釈しようとする場合、歌人の故郷の地勢・地形について本林勝夫が、出羽の内陸部に触れ、「村山盆地は金瓶に来て急にせばまり、南方上山小盆地に接続する。ためにこの付近で重畳する蔵王山塊の威圧感が著しく、その地形はなにか人間のいとなみの切実さを感じさせ、あるいは一種こもるような感味を与える。」と記していることが注目される。すなわち、さらに筆を進め、この地域の農民が着実地味であることを述べて、歴史と自然環境とは、彼らに「おのずからにして忍苦の精神の何ものであるかを学ばせて来た。」と論じ、それらを内側から出羽三山や蔵王の信仰が支えていたとする。そういう故郷金瓶についての叙述の中に、「こらへるといふは——」の一首を置いているのである。茂吉と故郷や自然・風土とのかわりを捉えるに際し、本林は、慎重な筆遣いを見せてすぐれた視点を提示しており、露の墓に寄せる茂吉の思いも、右のような事情と関連が深いと考えて間違いあるまい。

ところで茂吉は、早くから幸田露伴の文芸に傾倒していた。その露伴の随筆に『折々草』があつて、「損益」の一文を収める。「損は益の道なり、升は困の道なり、懼るゝものは安し、傷つくものは慰めらる、艱むは則ち吉、満るは則ち欠く、心の貧しきものは多福なり、忍辱は多力なり、火に逢はざれば純金ならず」云々と

いった箴言的、格言的要素の濃い文章である。最初新聞『国会』に載せられた後、「鶴護精舎雜筆」の中に入れて行本『ひげ男』(明治二九)に収められ、その後もさらに印行されたという。箴言や格言に関心を寄せた茂吉であつたから、自己の往時を顧みたり、また現在を思つたりするとき、しばしば脳裏に甦る言葉だつたであろう。昭和十一年(一九三六)十一月二十九日の永井ふさ子宛書簡にも、一文中の「忍辱は多力なり」の句を引き、苦境に置かれていた互いを励ましているふうである。忍従を余儀なくされたのは、自らを田舎人と考え椋鳥とも称する茂吉には、東京の日々の生活においても、事情はそれほど変わりなかつたかも知れない。

行論上まず掲出歌の結句を取り上げると「要約とする」という表現は鷗外に負うていた。茂吉の「五郎劇にいでくるほどのモラールも日の要約のひとつならむか」(『白桃』昭和一七・二)の歌があり、『作家四十年』によれば、「日の要約」は「日々の条件」とも言えるとし、鷗外の小説「妄想」(『三田文学』明治四四・三、四)中のゲーテの言葉「日の要求」から得たと打ち明けている。

「妄想」に見える「要約」という語は、「あることをなすに必要なる条件」といった用法で、鷗外の美学関係の書にもしばしば用いられており、茂吉はこれをも繙いたことがあつた。『博雅』には「要」の字について「約也」とある。一首は、露の墓のさまの「こらへる」ということは消極的なことではなく、充ち満ちようとする積極を条件としているということなのだなあ、の意味になるう。

先に茂吉に作用していた、いわば精神のヴェクトルを観察して見たが、茂吉にとつて、きびしい冬の季節に耐え、早春の光を受けて、その生命力を内側から現す露の臺の姿は、こらえるという消極的な形で見えても、その意味においては、積極的なものを示す形象として心に訴え、励みになるところがあつたのである。茂吉がしばしば使う語をもつてすれば、一首は思想的抒情詩（ゲダケン・リリック）であろうか。そこには自らの心事をも響かせている観があつて、歌人自らの言う「実相に観入して自然・自己一元の生を写す」趣のあることを認めるのも大仰ではないと思う。

佐藤佐太郎は、短歌の魅力の最も重要な原由として「言葉のひびき」すなわち声調を挙げ、茂吉の歌についても、その点を高く評価する歌人であつた。『斎藤茂吉秀歌』の「解説」で茂吉の歌論の枢要ないくつかを引いている。その中から声調に関係した言葉二、三を掲げると、「我等は意味の奇抜とか複雑な内容などよりも情調のふるひや情緒の動きが如何に表現されてゐるかを顧慮するがゆゑに從而言葉の響とその節奏に重きを置くのである」、「短歌に於ける言語の調は吾等の内的節奏さながらであるときはじめて意義をもつ。その言語には古語・現代語などの外的差別はいらぬ」、「力に満ちた、内性命に直接な叫びの歌は尊い。この種の歌を吟味するに際して、吾等は先づ、作者が如何なる「衝迫」から詠んだのであるかに留意する。第一に表はされた言語の直接性と、從而それに伴ふ力と純と単 (Einfachheit) とに留意する」とある。こうした言葉が茂吉の短歌写生の説に総合されており、その根本

は終生変わることはなかつたと、この門弟は述べる。「こらへると——」の一首も、如上の歌論の具現されている作物と解し、これを茂吉の秀歌に入れたとも考えられる。五・八・五・九・七と破調になつてゐる、漢語的声調をまじえた音数律も、こもつてゐるものがいよいよ力を發揮する際のリズムを表すかのごとく、露の臺の、その内より萌え出すいのちの呼吸を写すことと関係してゐたであろう。一首には、消極・積極・要約といった漢語を三つも使つてゐる点に作歌上の試みがあり、自らはそこにも意義を見ていたものと思われる。

こうした作品の表現が可能になつたのは、歌人の閱歴、その力量によること言うまでもないとしても、上掲露伴の「忍辱は多力なり」の一句のような精神がかかわつてゐたであろう。それにはまた茂吉と鷗外とのつながりもあつたのではないか。鷗外は左遷意識を抱き明治三十二年（一九〇二）から三十五年にかけて小倉に勤務してゐた時期、カール・フォン・クラウゼヴィッツ（一七八〇—一八三二）の『戦争及び戦争指導に関する遺稿集』 *Hinterlassene Werke des Generals Carl von Clausewitz über Krieg und Kriegführung*（一八三二—三四）を第十二師団の将校に講義し、『戦論』（明治三四）の書題で刊行した。これは陸軍士官学校の翻訳と併せ『大戦学理』（軍事教育会、明治三六）としても出版されたが、広く読まれる要件を備えるに至つたのは、大正十三年（一九二四）十二月鷗外全集刊行会より上梓された『鷗外全集 第十七卷』に収められてからであつた。この巻出版時、茂吉は留学か

らの帰途にあり、帰国直前青山病院焼失のことがあって、手許にはなかったはずであるが、その後入手して読んだと推断できる。昭和六年（一九三二）一月十二日の日記に、「鷗外ノ全集「兵論」ヲ読ム。」と記しているからである。しかし、第十七巻に「兵役篇」はあっても、これは軍陣医学と称すべきもので、しかもこのあたり印刷上の大きな不備がある。茂吉のいう「兵論」は、次の「赤十字条約並に其略評」の後に置かれてある『戦論』を指すものでなければならぬ。鷗外もこの書を『独逸日記』では「兵論」と書いたことがあった。同巻には、日露戦争関係の「黒溝台附近合戦に於ける低気温の戦闘、健態、創傷及び衛生勤務に及ぼす関係詳報」が収載されている一事も見落とす難い。茂吉の長兄守谷広吉も従軍し、第八師団の小隊長として活躍しており、鷗外はその師団の軍陣衛生や傷病の実態についても触れているのである。茂吉は後年ゆかりの地を訪ねて歌を作ったり、昭和十五年八月には郷里から長兄関係の黒溝台等の書簡類を取り寄せたりしている。長兄死去の翌年昭和六年十一月には、「うつけみのいのち絶えたるわが兄は黒溝台に生きのこりけり」（『石泉』昭和二六・六）の挽歌も残しているのであった。こうした脈絡も関係して、全集の第十七巻は時に繙くことがあったと思われる。ただし、『戦論』は自らも編者の一人となった岩波書店出版の『鷗外全集』（昭和一一〜一三）には入っていない。

右のような『戦論』で、「純抗抵の原則」について次のごとく論述する一節がある。これを鷗外は別のところで「純抗抵」「受動的

抗抵」とも呼んでおり、小国・弱国が大国・強国に対してとる戦略・戦術の一つで、鷗外にとっては極めて印象深い論理を展開したものであった。

我若し戦の継続時間を以て敵に勝たんと欲する時は我目的は始より小ならざるべからず所以者何にと云ふに我目的愈々小にして我節力愈々大なるべければなり我目的の最小なる者は純然たる抗抵に在り謂ふこゝろは積極性の企図なくして戦ふなり我にして純然たる抗抵を以て目的と為すとき我用力は最も少くして我には殆んど全く冒険の虞なからん（中略）蓋抗抵は一の動作なり而て此動作は以て敵の諸力を破壊するに足り以て敵をして其目的を抛たしむるに足らざる可からず（中略）是を我企図の消極性本質となす

此消極性企図は之を同種の積極性企図に比するに効果上毎に遜色あるべきこと論なし然れども企図の積極性なる者は成り難くして敗れ易く其消極性なる者は之に反す故に消極性企図は毎に効果上の損失ありと雖も時間即ち戦闘の継続時間は之を償ふに余りあり以て此消極性企図は敵に勝つに時間を以てする自然の方便なり

消極をとおして積極の勝利を得るといふこの戦略理論について、鷗外は「涼休録」（『歌舞伎』明治三三・七）で、「純抗抵の戦は敵を何う為やうとおもはない。唯、敵の為やうとおもふことを為せまいとおもふ丈だといふことだ。これは余程得用な戦法であつて、殊に弱国の戦法としては頗る用ゐるべきものだとしてある。」と紹

介し、「戦いの消極だけれど、その間に積極の勝利の無いことはない」とも記している。昭和四年三月に短歌写生の説の補強として茂吉は「療休録」を引いており、右の理論には言及していないが、消極に積極の潜勢力を見いだすという発想は、直捷にはその後『戦論』の繙読により、早春の生命の象徴さながらの露の莖を詠じる一首に響き、その詩眼となったのではないか。もともと、『戦論』を読んだ五か月後の昭和六年六月執筆にかかる「小歌論」で、和歌史上「写生主義」は、その「抑逐せるパッシビスムス」から「忍辱の力」によっていまや「強力なるアクチビスムス」に化したと述べており、消極・積極といった語は必ずしも特殊なものではなかった。『戦論』読後とはいえ、これと無関係にこの一文の箇所を書いたと考えられないことはない。しかし、鷗外の訳文及び説明をとおして、思考・論理の運びの要訣に、その語彙とともに改めて触れたことが考えられる。「純抗抵」をめぐる理論が、人間学的要素を濃く内包している一事も注目されてよい。語理解の深化による思考回路使用の体験は見逃し難い。「こらへるといふは——」の詠は、戦局の急迫や老いの身の心境が関係していたとしても、こうして鷗外によるところがあったであろう。語彙・表現の堅確性・規範性をこの先達に学び求めたということは、歌人自ら上にその例を記したあたりからも推知される(8)。この方面の事例をいま八雲書店刊行の四冊の『童馬山房夜話』(昭和一九二二)から抄出することはしないけれども、佐藤佐太郎は、茂吉の鷗外理解の深さを述べ、その頭脳には鷗外の言葉がいつばいつまつてい

たと回想している(9)。

しかしながら、茂吉は、あくまで茂吉であった。語彙・表現の面でこの先進に負うところがあつたにせよ、自らの思念、自らの心情・感性によって作品の世界を形成したと当然である。『戦論』の「純抗抵の原則」はどうであつたのか。この理論に関しては鷗外の「キタ・セクスアリス」(『スバル』明治四二・七)に、作中人物金井湛が田舎出である身の学生時代を振り返り、年齢の不足ということが関係して、何事をするにも、陽に屈服して陰に反抗するという態度になつたと語り、それを「兵家(Cassius)は受動的抗抵を弱国の応に取るべき手段だと云つてゐる」とする叙述がある。茂吉が大正十四年に買い求め、自家薬籠中のものにしていた鷗外の『妄人妄語』(大正四)でも、その実例としてトルストイの『戦争と平和』中の一事を挙げており、他の文章においても触れている。短歌写生の説の根固めのために茂吉は補いとして「療休録」を読み、「キタ・セクスアリス」についても岩波文庫の解説を昭和十年に書いているが、しかし、それらの中で、クラウゼヴィッツの名や『戦論』の書名及び「純抗抵」という言葉を紹介することはなかった。この問題をどのように考えたらよいのであるうか。

「こらへるといふは——」作歌後になるけれども、茂吉に「三年」(『国鉄情報』昭和二三・六)の一文のあることがここで想起される。故郷に疎開中の生活の一齣を回顧して、蟻を見るのが楽しみであつたと記し、ある日の夕方蟻が戦っているさまを次のように

観察している。「大きい蟻の足を小さい蟻が銜へてどうしても離さない。大きい蟻が怒つて車輪の如くに体をまはす、小さい蟻はそのままだまに回され、埃を浴びて死んだやうになる。(中略)そのうち大きい蟻が疲れて運動が鈍くなつて来た。(中略)さうなると今迄死んだやうになつてゐた小さい蟻が、むくむくと動き出して、あべこべに大きい蟻を牽くやうな恰好をする」。そして、その後の蟻の運命はわからなかつたが「実におもしろい」と評している。

小さい蟻の視点に立てば、これこそまさに「純抗抵の原則」の生きた例としてよい。鷗外についても、日記には戦術に関しては述べていない人と記している。戦争について言えば、茂吉は、戦争哲学ともいうべき原論的、大局的観点に立つて著したような本に対しては、あまり関心がなかつたらしい。正木ひろしによつて「政治哲学者」と評された北吟吉の、折からの著書『戦争の哲学』(昭和一八)を繙いた形跡もない。クラウゼヴィッツは、戦争を政治の一段として論を展開し、鷗外もそれに従つて訳述しているのであるが、茂吉は具体的な戦術やニュース映画の戦闘場面にのみ関心を払つていたごとくである。昭和十五年八月執筆の随筆「運命」において、老帝に和平を誓願するウイン市民の態度に対する批判的言辞も、このことに関連があるに違いない。中村稔が、「ふつう戦争といわれるものから、その政治的側面をきりすてた、いわば戦闘に、茂吉の関心は向いていたが、国際的な、国内的な政治の一形式としての戦争には、彼はまったく、無関心、無智であつた。」と述べたのは、正鵠を射ていると思われる(10)。

一体茂吉にとつて、その激しい論争態度にも見られるように、戦う場合には相手を徹底的に打ち負かさなければならなかつた(11)。「運命」の一文にも、「戦は、怨敵を撃滅せねばならぬ。これが原理である。」と書いている。同じころの執筆にかゝる「武者ぶるひ」の中でも、写生的観点の契機も作用していたと考えられるが、『翁草』から一武士の実戦談を引用し、戦闘直前の心理や戦闘のありさまにだけ注目している。「日本海海戦の追憶」(オール読物)昭和一七・六)においても、もっぱら戦術面に関心の中心はあつた。茂吉には勝利こそが問題であり、時間によつて敵に目的を放棄させるといった戦略的考への「純抗抵の原則」のような理論は、こうした場合、関心の外にあつたと言ふべきであろう。一軍医から日露戦争でのいわゆる奉天大会戦の勝利について感想を尋ねられた鷗外が、強いて言うなら悲惨の極みと言葉少なに答え、そういうことは軍服を身に着けた者として少し口をつつしむべきであると叱責したという挿話も残っている(12)。茂吉は実戦直後の生々しい跡を見たわけではなかつたけれども、もし同様の立場にあつたならば、勝利の喜びを熱く語つたかもしれない。昭和五年(一九三〇)秋に旅し、十年後に書いた『満州遊記』の、特に「黒溝台」「奉天」の一節は、そのことを想像させるに十分である。

同じく自らを椋鳥と称した鷗外・茂吉であつたが、上来観察した路の臺の一首をおさえるとき、ひとたびは類似の発想を示したものの、二人はかなり異なるタイプの人物であつたと観察される

のである(13)。解釈の対象とした掲出歌が、しかし、『戦論』と全く無関係に詠まれたものであったとしても、鷗外との影響関係を離れた対比という視点から考えるならば、取り上げた作品と茂吉の人とにかかわる論の要点は成立すると思うものである。

〔注〕

- (1) この方面についてはつとに中野重治・谷沢永一・加藤淑子を始め多くの論があるが、本林勝夫「茂吉における鷗外―「ななじきり」をめぐって―」(『斎藤茂吉 日本文学研究資料叢書』(有精堂、昭和五五)所収)参照。
- (2) 本林勝夫『斎藤茂吉 短歌シリーズ 人と作品 12』(桜楓社、昭和五五)一一頁参照。
- (3) 書誌の詳細については『露伴全集 第三十一巻』(岩波書店、昭和三一)の「後記」参照。
- (4) 佐藤佐太郎『茂吉解説』(弥生書房、一九七七)三八頁参照。
- (5) 書誌は清田文武『鷗外文芸の研究 中年期篇』(有精堂、平成三)四一頁参照。
- (6) 歌については小池光『茂吉を読む 五十年代五歌集』(五柳書院、二〇〇三)二二二―二五頁参照。
- (7) 稲垣達郎『稲垣達郎評論集 作家の肖像』(大観堂、昭和二六)二二―四五頁、注(五)四四―五二頁参照。
- (8) この方面については、谷沢永一「斎藤茂吉の作歌の態度」(『斎

藤茂吉 日本文学研究資料叢書』所収)参照。

- (9) 注(4)九四頁参照。
- (10) 中村稔『斎藤茂吉私論』(朝日新聞社、昭和五八)二四九頁参照。
- (11) 論争態度については本林勝夫『斎藤茂吉の研究 その生と表現』(桜楓社、平成二)三九四―三九六頁参照。
- (12) 山田弘倫『軍医としての鷗外先生』(医海時報社、昭和九)二二七頁参照。
- (13) この問題については、注(1)本林勝夫の論及び注(二)二八三―四〇八頁参照。